

幼稚園

平成 6 年 度

# 教育研究員研究報告書

幼稚園

東京都教育委員会

平成6年度

教育研究員名簿

主題	分科会主題	区市名	幼稚園名	氏名
幼児が充実した生活をしていくための指導の在り方	第1分科会 5歳児が友達とのかかわりの中で自分を表現し、相手の言動を受け止めながら遊びを楽しむための援助の在り方	千代田 港 文京 墨田 江東 世田谷 足立 府中	麴町 西桜 小日向台 緑 辰巳 砧 関屋 小柳	小口眞美 藤井英子 △梶並清江 三本敦子 ◎堤則子 荒井かおる 桑原裕子 中熊真紀子
	第2分科会 たくましい幼児を育成するために幼児の思いをどのように受け止め援助していけばよいか	中央 新宿 台東 江東 目黒 杉並 荒川 板橋 葛飾	中央 富久 精華 第二辰巳 みどりがおか 高円寺北 南千住 新河岸 水元	稲留恭子 □菊池久子 坂崎美智子 大竹ひとみ 松下洋子 △石渡登志江 安田徳章 友部秀子 武井美和子

◎世話人      □副世話人      △記録

担当 教育庁指導部初等教育指導課指導主事      岡上直子  
教育庁指導部初等教育指導課指導主事      井上千枝美

## 目 次

研究に当たって .....	2
<第1分科会>	
5歳児が友達とのかかわりの中で自分を表現し、相手の言動を受け止めながら遊びを楽しむための援助の在り方	
I 主題設定の理由 .....	3
II 研究方法 .....	3
III 研究内容	
1 主題のとらえ方 .....	4
(1) 充実した生活とは .....	4
(2) 友達との遊びを楽しむ幼児とは .....	5
2 実践事例	
(1) 気持ちの行き違いがあり、喧嘩になった事例 .....	6
(2) 互いの思いに気付きながら遊びを進めていった事例 .....	7
(3) 夏休み明けに、やり慣れた遊びをすることで友達とのつながりを 取り戻している事例 .....	9
(4) くい違ったイメージを共通にして遊んでいった事例 .....	11
IV まとめと今後の課題 .....	13
<第2分科会>	
たくましい幼児を育成するために幼児の思いをどのように受け止め援助していけばよいか	
I 主題設定の理由 .....	14
II 研究方法 .....	14
III 研究内容	
1 たくましさとは .....	15
2 たくましい幼児像 .....	15
3 たくましさをとらえる要素 .....	15
4 実践事例	
(1) たくましさの要素をとらえる事例 .....	16
(2) 教師の意識を変えていくことにつながった事例	
①教師が製作への不安感を受け止めたことで、たくましさが発揮できたC児 .....	18
②友達とのかかわりの中でたくましさが見られたD児 .....	20
③忍者になりたいという思いを出して楽しんでいるH児 .....	22
5 たくましさを育てる援助 .....	23
IV まとめと今後の課題 .....	24

# 研 究 に 当 た っ て

## 共通研究主題

「幼児が充実した生活をしていくための指導の在り方」

幼児期は、人格形成の上ですべての基盤であり、幼児がこの時期に体験したことは、生涯にわたって影響を与えることになる。この重要な時期に、幼児は主体的に環境にかかわり、豊かな体験を重ねることにより、活動に対する意欲が高まる。また、初めてのことにも積極的に取り組み、多少の困難があってもくじけず、挑戦しようとする気持ちを持ち、繰り返し行うことによって、やり遂げた満足感や充実感を味わい、幼児は充実した生活をしていくようになる。このような体験ができるようにするために、教師は、幼児が友達や教師とのかかわりの中で自分の思いを実現していけるような環境の構成をすることが重要である。そこで今年度は、共通主題を「幼児が充実した生活をしていくための指導の在り方」として、研究を進めることにした。研究に当たっては、2分科会を構成し、各分科会における研究主題及び、研究内容は次の通りである。

### 第1分科会

「5歳児が友達とのかかわりの中で自分を表現し、相手の言動を受け止めながら遊びを楽しむための援助の在り方」

幼児が充実した生活を送るためには、友達とのかかわりの中で、自分の思いを表現し、また、相手の思いや考えを受け止めながら、遊びを進めていくことが大切である。そのためには、安心して自分を出せる環境、友達とのかかわりの中で得られる満足感や充実感を味わう体験が重要である。5歳児の事例を中心に、幼児が友達とかかわったときの相互交渉の姿から幼児が遊びを楽しむ援助の在り方を探ることにした。

### 第2分科会

「たくましい幼児を育成するために幼児の思いをどのように受け止め援助していけばよいか」

幼児一人一人が持っている力を十分発揮し、目的を実現して充実した生活を作り出していくたくましさを育てるために、教師は幼児の思いをどのように受け止め援助していけばよいかを明らかにしたいと考えた。そこで、文献やエピソード記録からたくましさの要素をとらえて、たくましい幼児像を明らかにしていくと共に、たくましが育っていく過程において幼児の思いの受け止め方や援助の在り方を探っていくことにした。

## 幼児が充実した生活をしていくための指導の在り方

—— 5歳児が友達とのかかわりの中で自分を表現し、相手の言動を受け止めながら遊びを楽しむための援助の在り方 ——

### I 主題設定の理由

幼児は友達とかかわりながら、互いに認め合ったり、励まし合ったりすることで、自己を発揮したり、様々な感情体験をしたりする。そして、とりわけ、5歳児は、その中で友達を思いやる心が芽生え、相手の言動を受け止め、相手の気持ちを考えながら、遊びを進めることができるようになると思う。

最近の5歳児を見ると、自分が興味のあることに対して意欲的に取り組み、自分の思いをはっきり出すなどの姿が見られる。一方、自分の気持ちをコントロールすることが苦手である、やりたいことだけしかやらない、自分の思いは出せるが人の話が聞けない、困難なことに出会うとなかなか立ち直れない、自分の感情や思いを相手に分かるように表現できないなどの姿も見られることが多い。

幼児が充実した幼稚園生活を送るためには、安心して過ごせる幼稚園生活がある、先生や友達に認められたり、共感してもらえたりして満足感を味わうことができる、また、自分のこうしたいという目的があり、課題に挑戦してできるようになり達成感を味わうことができることなどが考えられる。それは、幼児が友達との遊びの中で自分の思いや考えを出して遊びそれが友達に受け入れられた嬉しさの快感情や友達に自分の言動を非難されたり自分の気持ちがわかってもらえない悔しさなどの感情を体験などをしながら達成していくものであると思われる。

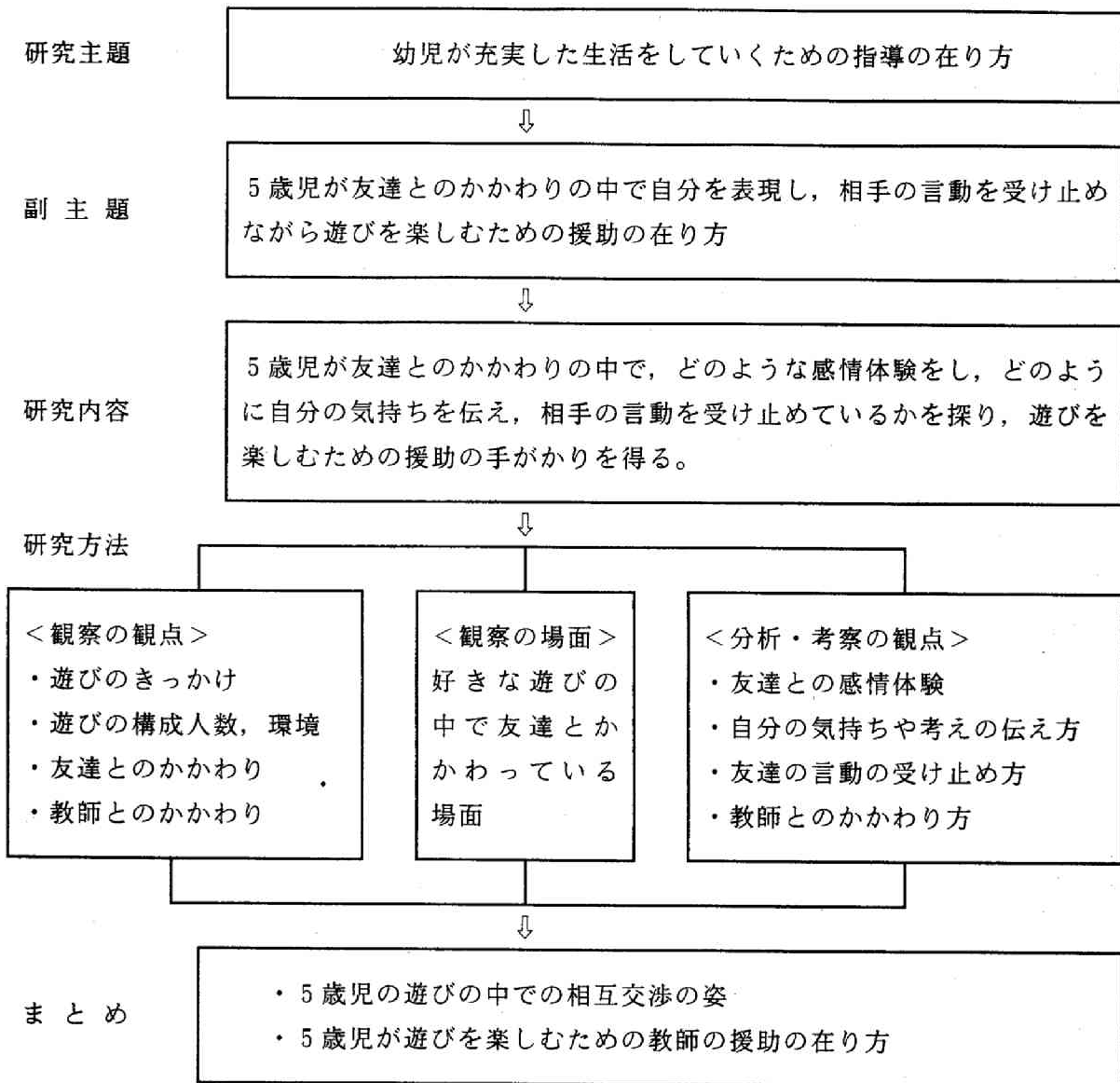
このような経験を積み重ねることにより、幼児は困難なことに出会っても乗り越えようとするようになる。そのためには、5歳児においては、まず自分の思ったことや考えたことを表現し相手の言動を受け止めながら遊びを楽しむ幼児の育成を図ることが大切であると思う。

そこで、幼児が友達とのかかわりの中で、充実した幼稚園生活を送るには、教師の援助はどうあったらよいかを探るために本主題を設定した。

### II 研究方法

- 1 充実した生活を送る幼児像、相互交渉の姿などについて研究文献、研究資料を参考に、共通理解を深める。
- 2 5歳児が友達と相互交渉をしながら遊びを楽しむための教師の受け止めや援助の在り方を探る。
- 3 5歳児が遊びの中で友達とどのような相互交渉をし、そこでどのような感情体験をしているのか研究保育、持ち寄った実践事例を通して明らかにする。

【研究の構造図】



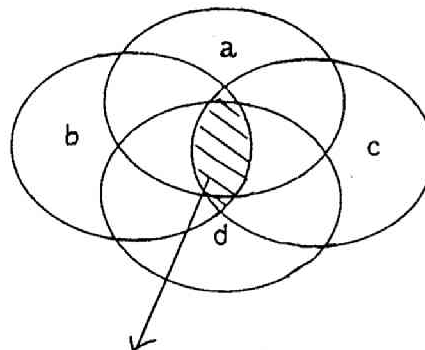
Ⅲ 研究内容

1 主題のとらえ方

(1) 充実した生活とは

《充実した生活をしている幼児の姿》

- 自分の思ったことを表現する(a)
- 友達と共感したり、認め合ったりする(b)
- 目的や課題をもって取り組み、やりとげた満足感を味わう(c)
- 生活や遊びに見通しがもてる(d)



楽しい幼稚園 = 充実した生活



《充実した生活を支えている要因》

- ・自己を発揮する。
- ・生活習慣を身に付ける
- ・人とかかわる力を身に付ける
- ・生活に必要な技能を身に付ける。
- ・豊かな生活経験がある。



《基礎となる要素》

- ・情緒の安定
- ・主体性の確立
- ・存在感のある学級

## (2) 友達との遊びを楽しむ幼児とは

5歳児になると、友達とのつながりが深まり友達の存在が遊びに影響を及ぼす。そして遊びの中において様々な感情体験をする。したがって、5歳児が友達との遊びを楽しむには、自分の考えたこと、やりたいことを主張するとともに、相手の考えたこと、やりたいことも受け入れて、遊びに取り組めるようになることが重要である。そのために、次のような姿が見られるようになることが必要である。

友達との遊びを楽しむ幼児の姿



<自分を表現する>

- ・自分の気持ちや考えを言葉や動きなどで表す。
- ・自分の気持ちや考えを相手に伝わるように表現する。

友達とのかかわり  
の中で



<相手の言動を受け止める>

- ・相手の気持ちや表情に気付く。
- ・相手の気持ちや考えを感じ取る。
- ・相手の話を聞き、理解したり、判断したりする。

## 2 実践事例

事例を通して援助の在り方を考えていく上で、幼児が友達とのかかわりの中でどのような感情体験をしているか、どのような相互交渉をしているかを具体的に読み取るために次のように表記の工夫をした。

○印＝喜び・快感情，      ×印＝不快感情，      △印＝とまどい

————→＝直接的行為，      ……→＝間接的行為

- ・○×△の表記はそれぞれの感情が顕著に表れた時につける。
- ・上記の記号で表せないものについては、文章で表記する。

(例)

幼児と教師の言動	分 析
① Y児は担任の姿を見ると足早に歩いてきて「Mちゃんが（後略）」	①担任に助けて欲しい Y児△ —————→教師

(1) 気持ちの行き違いがあり、喧嘩になった事例

3年保育5歳児 6月上旬

5歳児9名と3歳児1名（5歳児B児の妹C児）が2チームに分かれてリレーをする。C児はトラックのコースをはずれ内側を走ってきた。次の走者のA児がC児に何も言わずにバトンを受け取ったことから相手チームのB児が怒りA児に「出て行け。」と言う。

幼児および教師の言動	分析
①A児が「出て行くのはいやだ。」と言うと、B児は怒っている表情をさらに歪めて「それなら、ぼくが出て行けばいいんだろう。」と怒鳴り、その場から去ろうとする。	①気持ちを受け入れてもらえない。 A $\begin{matrix} \times & \longrightarrow & \times \\ \times & \longleftarrow & \times \end{matrix}$ B
②教師が「Bちゃん、ちょっと待ってよ。どうしてBちゃんが出ていけなくちゃいけないの？」と尋ねると「そっちが“ずる”しているのにやめないからだよ。」と答える。	②相手の非を責める。 教師 $\begin{matrix} \Delta & \longrightarrow & \times \\ & \longleftarrow & \times \end{matrix}$ B
③A児が「わたしは“ずる”してない。」と言うと、B児が「Cちゃんが緑（フィールド部分）に入って走ってきたのに注意しないで、そのまんまバンドもらっただろう。」と言う。	③不満をぶつけ合う。 A $\begin{matrix} \times & \longrightarrow & \times \\ \Delta & \longleftarrow & \times \end{matrix}$ B
④D児「しょうがないだろ。まだ、3歳だからわかんないんだよ。」と言うと、E児「そうだよ。はな組なんだから。」と言う。B児「はな組だって注意すればいいだろう。」と言う。	④A児の動きをかばう。 D $\longrightarrow \times$ B E $\longleftarrow \times$ B
⑤教師が「AちゃんはCちゃんが緑の中に入って走って来たのを見てどう思った？」と尋ねると、B児が「早くバトンもらって勝てるって思ったんだろ。」と言う。A児「違うよ。」と言うと、B児「じゃあ、何だよ。」と聞く。A児は「言えなかったの。」と答える。B児が「何で言えないんだよ、おっきい声出るくせに。」と言うと、A児は両手を握りこぶしにし、怒って泣きそうな顔でしばらくB児をにらむ。B児が「はやく言ってよ。」と催促すると、A児は「かわいそうだったの。」と叫ぶ。	⑤怒りをぶつけ合う。 B $\begin{matrix} \times & \longrightarrow & \times \\ \times & \longleftarrow & \times \end{matrix}$ A A児の思いを感じ取る。 A $\cdots \longrightarrow \times$ B
⑥教師は保育室の方へ歩き出したB児の肩を抱いて幼児たちに「AちゃんがCちゃんに言わなかったの悪かったかな？」と尋ねると「悪くない。Cちゃん、ちっちゃいもん。」と口々に言う。B児は教師の手をふりほどいて歩こうとする。	⑥A児の思いもわかるが自分の言い分を誰も認めてくれずどうにもならない。 教師 $\longrightarrow$ 幼児たち $\longleftarrow \times B \times$
⑦教師がB児の肩を離さず「それじゃ、BちゃんがAちゃんに『出ていけ』って言ったの悪かったかな？」と尋ねると幼児たちは「悪くない。だってさ、本当はリレーの時は緑の中に入っちゃいけないんだからさ。」「悪くない。」と答える。	教師 $\longrightarrow$ 幼児たち ○ B児は友達が自分 B の思いを受け止めてくれて嬉しい。



《考 察》

① 遊びの中での相互交渉の姿

- B児は自分の言い分を聞き入れてもらえないという不快感情を味わっていたが、A児や友達が妹をかばう気持ちを感じ取り、不快感情を和らげていく。
- B児は友達が自分の気持ちをわかってくれたことを感じとり快感情になる。
- B児は自分の言動を非難された時やわかしてもらえない悔しさを感じたときには、怒鳴ったり、こぶしを振り上げたりする動きが見られるなど、怒りが強いときには体で表現することが多い。
- 少しでも自分が理解されたと感じたときには、自分をわかってほしい一心で気持ちや考えを言葉で表現する。したがって、互いの理解につながる相互交渉であるかどうか、遊びを楽しめるかどうか大きく作用する。

②遊びを楽しむための教師の援助の在り方

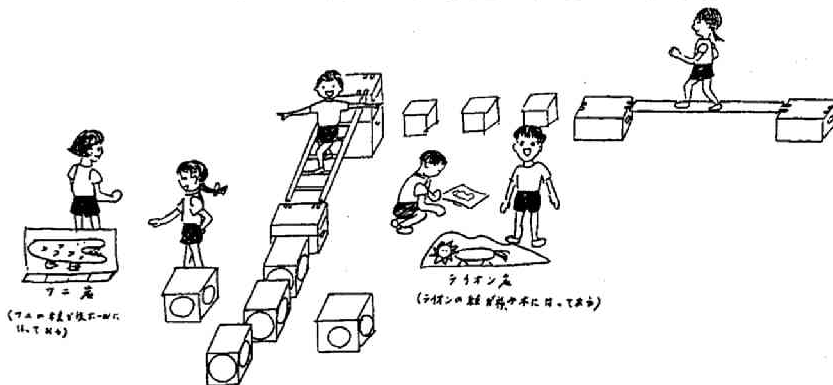
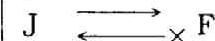
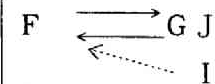
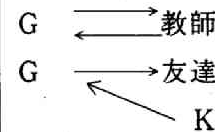
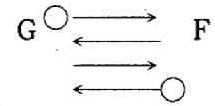
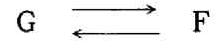
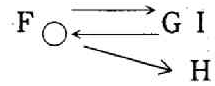
- B児が反抗的な態度をとるのは、他の幼児たちや教師がA児の味方をし、自分の気持ちを理解していないと感じたからだと思われる。その後、教師が調整役に入ったことで、友達にわかしてもらえるように話し合いが展開していったことに、B児は納得したのではないかとと思われる。
- 教師は一人一人の気持ちや考えを聞き、「いい」「悪い」ではなく、その子なりの納得が得られるように、互いの気持ちや考えをつなげていくことが大切である。
- 友達とのかかわりの中で不快感情をもって、友達の支えや教師の援助によって立ち直るきっかけをつかみ、快感情に変わっていく。したがって、不快感情の体験はマイナス体験ではなく、より遊びを楽しむために大切な感情体験となりうる。

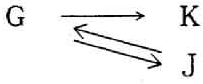

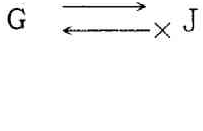
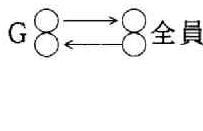
(2) 互いの思いに気付きながら遊びを進めていった事例 2年保育5歳児 6月下旬

好きな遊びの中で、友達と探検ごっこをするために巧技台やゲームボックスを組み合わせて探検の場を作っている。

幼 児 お よ び 教 師 の 言 動	分 析
<p>① G児は、教師に「これくらいでいいんじゃないの?」と言いにくる。教師は、G児に「友達に聞いてみれば。」と言うと、G児は「Fちゃん、このくらい?もう少し?」とF児に聞く。F児は「まだもう少し作る。」と返事をする。</p>	<p>G → 教師            ← G            G → F            ← F</p>
<p>② しかし、G児は「私、裸足になる。」と言いながら、靴と靴下を脱ぐと、それを見てH児、I児も一緒に裸足になり、三人は滑り台を山に見立てて下から登り始める。</p>	<p>G ○ → H            → I</p>
<p>③ F児はビームの片方の端を持ちながら「Jちゃん、これ持って。ねっ持ってよ。」と言うと、J児が走ってきてビームのもう片方の端を持つ。</p>	<p>F → J            ← J</p>

- ④ F児は遊んでいるG児, H児, I児に「ねっ作ってよ。」と言うと, G児, I児は「はい。」と返事をするが, どうしてよいかわからずにいる。
- ⑤ 教師は「Fちゃん, 何を作ってほしいのか友達に言わないとわかんないよ。」と言う。
- ⑥ F児とJ児の二人は, ビームを巧技台の蓋にはめ込もうとするがうまくいかない。F児はJ児に「もっと遠くにして。」と言うが, J児は「違うよ。その積み木をどかせばいいんだよ。」と言い返す。F児は言われたようにしようとするが, 手にビームを持っていてできない。
- ⑦ そこへG児が「何作っているの?」と来る。F児に「それどかして。」と言われ, G児は積み木をどかしてビームが巧技台の蓋にうまくはまるようにする。
- ⑧ G児が「もうこれくらいでいいよ。」と言うと, F児は「もうちょっと作った方がいいよ。前はここに岩があったよ。」と言う。G児は「違うの作っているの。」と言うと, F児「あっそうか。」と納得する。
- ⑨ F児は積み木で作ったワニ岩を指差しながら「これ持って。」と言う。I児, J児, K児の三人が一緒に持ち, ワニ岩の場所を変える。
- ⑩ H児は教師に「どっちに行くかわかんない。」と聞く。教師は「友達に相談してごらん。」と言う。H児は周りの友達に「ねえ, どっちから行くか決めよう。」と言うと, K児に「だから今それを決めるの。」と言われる。
- ⑪ 一方, J児は「じゃ, こっから行く, Fちゃん。」と言いながら, ライオン岩を指差す。そして, J児は「こう行って, こう行って。」と自分で歩くコースを決めながら歩いて行く。
- ⑫ F児は「ねえ, ゲームボックスで道作る。」と言うが, J児は歩くコースを決めて歩いている。
- ⑬ F児は「Gちゃん, Jちゃん, ねえ, 道作る。」と再び言うと, G児, J児, I児はF児と一緒にゲームボックスで道を作り始める。
- ⑭ J児は「ふたつの道作る。」と言うと, F児に「なんで? そしたら足りなくなっちゃう。」と言われ, J児はひとつにする。



⑮ G児はJ児に「こっちにまがって。」と言うと、J児「えっどっち。」と聞くとG児「こっち。」と指示をする。	
⑯ G児はゲームボックスの上を歩き始める。それを見てF児は「Gちゃんも作ってよ。」と言う。	
⑰ G児は作ろうとして「あっ、ゲームボックス足りない。」と言うと、J児は「積み木にしようよ。」と言いながら、足りない分を積み木で作る。	
⑱ 道もできあがるとG児は「ねえ、Iちゃん、Jちゃん皆きて。」と言って、全員を自分の所に呼び集め「もうこれくらいでいいよね。」と言い遊び始める。	

《考 察》

① 遊びの中での相互交渉の姿

- 一緒に遊んでいる友達関係は 探検ごっこ という大きな部分では分かり合っている関係であるが、G児、H児、I児のようにすぐ遊びだしたい幼児、F児のように作ってから遊びたい幼児など個々の欲求に違いがみられるが、相手の気持ちを部分的に感じながら、自分の気持ちや考えを出し遊びを進めている。
- F児とJ児の関係はいつも遊んでいる仲間なので、相互交渉が多く、自分の思いを出したり、相手の思いに気付いたりして互いの思いに応答し合って遊びが進められている。
- 一緒にいることでつながりを楽しんだり、互いに受け入れてもらえているという安心感から、遊びが進められている。

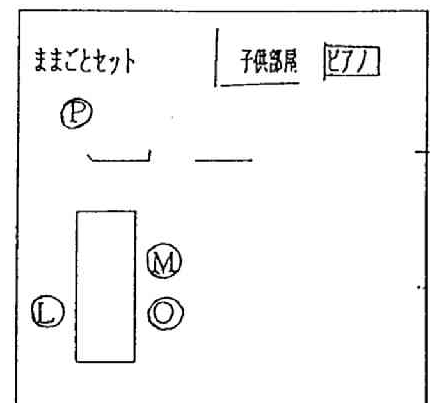
② 遊びを楽しむための教師の援助の在り方

- 教師は一人の幼児だけに答えるのではなく、周りの幼児に返していることは、友達同士の相互交渉を多くしているものと思われる。
- 自分たちで遊びが進められているときは、幼児一人一人がどのような相互交渉をしているのか関心をもって見守り、その意味を読み取りながらそれに添った援助をしていく。
- 大きなイメージは共通になっているが、個々のイメージをつなげるために、一人一人の動きやイメージを伝える働きかけをする必要がある。

(3) 夏休み明けに、やり慣れた遊びをすることで友達とのつながりを取り戻している事例

2年保育5歳児 9月中旬

- ・登園するとL児、M児が「お家ごっこしよう。」と誘い合い家を作り始める。L児がお母さん、M児が大学のお姉さん役になり、自分たちでなりたい役になっている。
- ・M児が「バーベキューを始める。」と言い出し、O児、P児、Q児等と一緒に積み木を並べたり、ごちそうを作ったりしてバーベキューごっこを始める。R児、S児等も加わり一緒に遊び出す。



幼 児 お よ び 教 師 の 言 動	分 析
<p>①M児は椅子に座り、フライ返しで肉をひっくりかえしている。L児「何作ればいいの?」とM児に聞く。M児「Pちゃんが材料もっていて作っているから何でもいいよ。」と言う。L児「Pちゃん、中に何入れるの?」と聞く。P児「ティッシュ入れるの。」と言いながら緑の紙を丸めピーマンを作る。L児もそばに座って作りだす。教師「なんだかいい匂いがしてきたね。」と言う。</p>	<p>L → M L ← M 教師○ → 皆</p>
<p>②S児が1, 2と数え「7人だね、全部で7人いるんだから。」と言って、台所に大きな皿を取りにいき持ってくる。M児に「はい、お皿、7人分ね。」と言って渡す。M児「ありがとう。」と言って受け取る。</p>	<p>S → M S ← M</p>
<p>③M児、肉をフライ返しで取り皿に盛り、隣にいるO児に「はい、どうぞ焼きました。」と言って渡す。O児「ありがとう。」と言って受け取りテーブルの上に置く。</p>	<p>M → O M ← O</p>
<p>④M児「はじめてのバーベキューだから楽しいね。」とO児に向かって言う。O児「わたし、夏休みバーベキューしたんだよ。」と言う。M児「外で食べると気持ちいいよね。」と言いながら、皿に肉を盛り付ける。</p>	<p>M○ → O○ M○ ← O○</p>
<p>⑤M児「あっ、そうだ。キャベツがなくっちゃね。」と言って立ち上がり、「あとミートソース作っておいてね、おばあさん。」と言って、台所に緑の紙を取りに行く。O児「はいはい。」と言って、鍋の中をかきまぜる。</p>	<p>M → 皆 M ← O</p>
<p>⑥M児は緑の紙を持ってきてちぎり、皿に盛った肉の隣に添える。「おばあさん、お皿を皆に分けてちょうだい。」と言う。テーブルの上が一杯で置く所がない。O児「どこに置こうかしらね、これじゃ置くとこないじゃない。」と言う。 そばにいたL児「ここに置いたら。」とテーブルの上を少し整理する。O児「そうだね。」と言って置き、「ミートソースもここで煮てんだよ。」と言う。</p>	<p>M → O L → O L ← O</p>
<p>⑦M児「ねえ、手でやると火傷するからね、気を付けるのよ。」と言いながら、肉を皿に盛り付ける。廊下でダンスをしている子ども役のQ児に向かって「Qちゃん、Qちゃん、遊んでないで手伝ってちょうだい。」と言う。Q児「なーに。」と言いながらM児の所に来る。</p>	<p>M → 皆 M → Q M ← Q</p>

《考 察》

① 遊びの中での相互交渉の姿

○やり慣れた遊びをすることで、思ったことや考えたことを言いながら、友達の気持ちを探ったり、つながりを感じとったりして、夏休み前の友達関係を取り戻していこうとする様子が見られる。

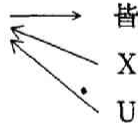
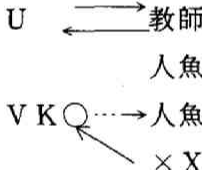
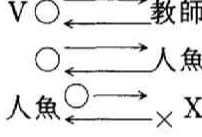
○自由に言い合える雰囲気や友達とのつながりが築かれているので、他愛のない会話をしながら、素直に互いの言動を受け止めている。

② 遊びを楽しむための教師の援助の在り方

○幼児が互いの気持ちを探り合ったり、つながりを取り戻していけるよう、教師は幼児がやり慣れた遊びができるよう環境を整え、時間を十分にとり自分たちで遊びを進めていかれるように場の調整をしたりしていく。

○互いに自分を出し合ったり、受け入れたりして遊ぶ楽しさが味わえるような雰囲気を作ったり、それぞれのよさを周りの幼児に伝わるような援助をしていくことが大切である。

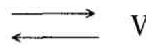
(4) くい違ったイメージを共通にして遊んでいった事例 2年保育5歳児 10月上旬

幼 児 お よ び 教 師 の 言 動	分 析
<p>V児, T児, U児, W児, X児は, 遊戯室で海賊船ごっこのイメージで遊び出すが, 海賊船を作るより, それぞれに剣を作ったり, 地図を描いたり, 戦いごっこをしたりしている。教師が「海賊船に乗りたいな。」と言ったことがきっかけで, X児, U児が中心となって海賊船を作る。V児, T児, W児たちは戦いごっこを続けている。</p>	<p>教師 → 皆  </p>
<p>海賊船ができあがるとU児が教師を呼びに行く。教師と人魚姫ごっこをしていた女児3~4名が来て, 海賊船に乗る。V児, K児は船に客が乗ったと思い, 「おみやげあるの。」と言って, 客に宝石を配る。X児は「宝石をあげるばかがあるか。」と言って取り上げる。V児は「剣を持ってくるのを忘れた。」と言って, W児と一緒に保育室に取りに行く。</p>	<p>U ↔ 教師            人魚            V K ○ → 人魚  </p>
<p>V児は剣を持って戻って来ると「はい, 休憩時間でーす。降りて下さい。」と大きな声で言う。教師と人魚は海賊船から降りる。人魚たちは「ホテルはどこかしら?」と聞くが, X児に「海賊船なのにホテルなんかない。」と言われる。</p>	<p>V → W            V ○ ↔ 教師            ○ ↔ 人魚            人魚 ○ → X  </p>
<p>教師はこの遊びの様子から“海賊船ごっこ”という大きなイメージは分かり合っているが, 船に対する思いやイメージが一人一人異なり, 同じ方向で遊びが進んでいないと思った。そこで, 降園前に教師は遊びの中で幼児がどのように遊びたいのか, やりたいことは何かを明確にし, くい違ったイメージを共通にしていき, 友達同士がつながって遊びが進められるようにした。</p>	

↓

<翌 日>

教師はT児らと「どんな船をつくりたいか」話し合い“海賊船”を作ることになる。遊戯室で海賊船作りが始まり2艘作ることになる。2チームに分かれて戦いが始まる。

幼 児 お よ び 教 師 の 言 動	分 析
<p>① T児はW児たちの船に行き「Vちゃん, こっちの船こわいよ。水, 満</p>	<p>T ↔ V  </p>

腹。」と言うと、V児「何で？」と聞く。T児「だってほら空いているんだもん。」と船を形どった積み木のすき間を指差すとV児は「ほんとだ。」と言う。

② A児「宝をさがさなくちゃ。」と言いながら、宝箱を自分の船に持っていくと、相手のW児は「あっ、ずるいぞ、そっち宝。」と言う。

③ T児が「とらなかつたんじゃないか。」と言うと、W児と同じチームのZ児は「宝なくてもいいよ。」と言う。

V児が戦いの曲を流すと、戦いごっこが始まり、皆動き回る。

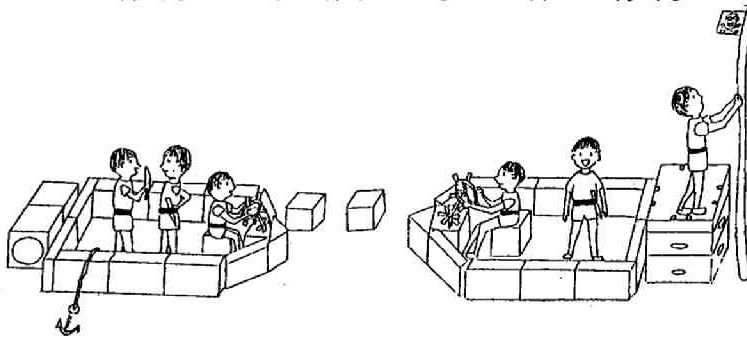
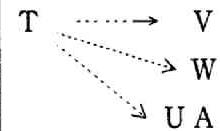
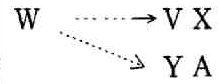
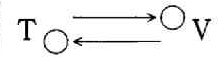
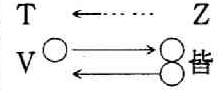
④ 今度は、T児たちの船を形どった積み木にすき間ができる。T児とW児は味方のV児に「はやく直して。」と言う。V児は「どこどこ。」と見付けようとするがなかなか見付からない。

⑤ T児「直さないよ。」とすき間を指差すと、V児が直す。

⑥ W児「のどがかわいた。水飲みに行く。」と言いながら保育室へ行くと、Z児以外も一緒に行く。(Z児は剣を持っていなかったのので、戦いの途中で剣を作っている。)

⑦ 水を飲んで戻ってくるとV児は「あっ、曲が止まっている。また、初めから戦おう。」と言って、曲を流す。Z児以外戦い始める。

⑧ 戦っているうちに剣の先が壊れてきたT児は「剣、直そう。」と言いながらZ児が作っている所へ行く。V児、W児、A児も「直そう。」と言いながら行く。U児も「作りたい。」と言って行く。



《考 察》

① 遊びの中での相互交渉の姿

- イメージがくい違っていても、ある程度受け入れながら相互交渉をし遊びを進めている。
- 遊びの目的が友達の中ではっきりすると、友達とつながりを持ち、自分のイメージを互いに出し合いながら、遊びが進められるようになる。
- 一人の発言が遊んでいる仲間に受け入れられて、活発に遊びが進められている。

② 遊びを楽しむための教師の援助の在り方

- 教師は幼児が作りたい物がはっきりしなかったり、イメージにくい違いがあるときは、何がしたいのか幼児のやりたいことを明確にし、幼児同士のイメージをつなげる必要がある。



#### IV まとめと今後の課題

友達とのつながりをつけていく時期

##### ○ 相互交渉の姿

- ・5歳児は友達とのつながりが深まってくる時期なので、その中で一人一人が自分の思いや考えを主張していくようになる。その中で、相手の出方により、とまどいを感じたり受け入れてくれた嬉しさを感じたりするなど多様な感情体験をしながら、自分の気持ちを調整したり、友達の思いや考えを受け入れようとしたりする。
- ・いつも遊んでいる友達同士は、相互に応答を楽しみ、互いに快感情を多く味わうようになる。このような友達関係は、相手の自分への受け止め方や、相手の感情などに気付くようになってきているからと思われる。

##### ○ 遊びを楽しむための教師の援助の在り方

- ・この時期は、自分の思いや考えを出せるようになるが、一緒に遊んでいる友達の言動に対しては関心が薄いので、教師と一緒に遊んでいる友達に聞こえるように、一人一人のしていることを言葉に出して認めていき、相手の言動に気付かせ友達とのつながりをつけていくようにする。このことから、幼児は自分のしていることが友達に受け入れられた喜びを感じ遊びを楽しむようになる。

友達とのつながりを深めていく時期

##### ○ 相互交渉の姿

- ・長期の休み明けにおける遊びの中では、自由に言い合える雰囲気や、友達とのつながりが築かれているので、他合のない会話をしながら、互いの言動を素直に受け入れ、友達とのつながりを取り戻す姿がみられる。
- ・友達とのつながりが付いてくると、一人の幼児の言動が、一緒に遊んでいる友達に伝わり、受け入れられ、遊びが進められている。

##### ○ 遊びを楽しむための教師の援助の在り方

- ・教師は遊びの中で一人一人の幼児がどのような相互交渉があったか、どのような感情体験をしているか、そこでどのような関係が成立しているかを読み取って、幼児同士の人間関係を豊かにしていく。このことから、幼児は様々な友達とのかかわりの中で、多様な感情体験をすることによって、自他が明確になるとともに、一人一人の友達の思いや考えを受け止めながら、自分を出していくようになると思われる。遊びの楽しさは、そのような友達との共感性の中で得られるものと思われる。

以上のように、幼児が友達とのかかわりの中で、自分を表現し、相手の言動を受け止めながら、遊びを楽しむためには、学級が幼児にとって開かれた環境になっていること、心の居場所であることが基盤であり、幼児が自分の気持ちを表すことができるようにすることが大切である。また、遊びを楽しむためには、友達関係を育てることが大切である。友達と遊ぶ楽しさ、その中で多様な感情体験がもたらされていることによって、さらに、友達との関係が深まり遊びの充実につながっていく。

今後は、一人一人の幼児が「あしたも幼稚園に行きたいな。」と思えるような、充実した生活を送ることができるように、さらに教師の援助の在り方を探っていきたい。

## 幼児が充実した生活をしていくための指導の在り方

—たくましい幼児を育成するために幼児の思いをどのように受け止め援助していけばよいか—

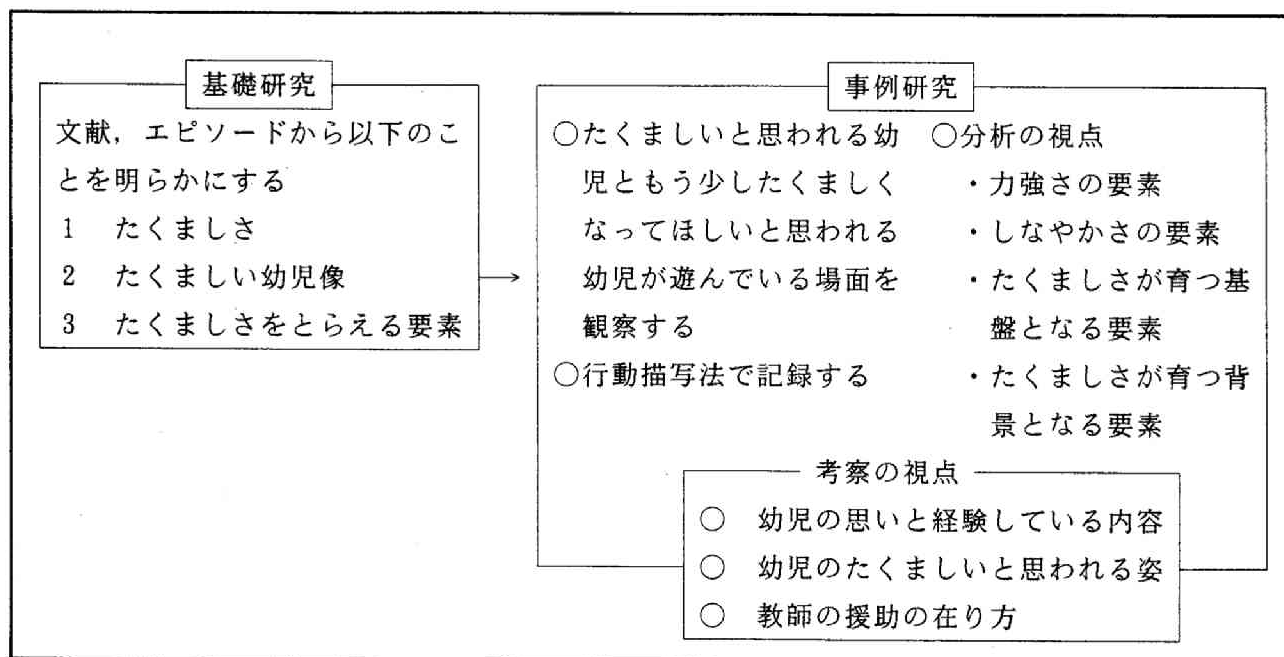
### I 主題設定の理由

近年、生涯教育の重要性が問われており、幼児期はその基礎を培う大切な時期である。生涯学び続けていくためには、様々な環境の変化に対応し自分で判断し決定していくたくましさが必要であり、幼児期にはたくましさの芽生えを育てていくことが重要である。

幼児の生活は遊びが中心であり、幼児は遊びの面白さや楽しさを味わうと、充実感・満足感を得てさらに意欲が高まり、次の遊びを展開していく。しかし、日頃の幼児の様子を見てみると、自分がやりたいという意欲をもちにくかったり、遊びの楽しさや目的をもたないまま時間だけを費やしていたり、面白さを味わう前に遊びをやめてしまったりする幼児がふえてきたように思われる。一方教師は、たくましさを育てたいと思うあまり、必要以上に高い要求を幼児にしてみたり、逆に見守りすぎたりして、幼児に迷いやあきらめ、挫折感を味わわせてしまうことがあるのではないかと考える。

こうした幼児の現状と指導の反省から、幼児一人一人がもっている力を十分発揮し、自分の目的を実現して充実した生活をつくりだしていくたくましさを育てる指導の在り方について、幼児の側にたって考え直す必要性を痛感している。そこで、教師は幼児の行動、表情、しぐさ、言動などを通して、幼児の思いをどのように多面的に、より深く、受け止め援助していけばよいか視点を明らかにし援助の在り方を探りたいと考え、標記の主題を設定した。

### II 研究方法



— ま と め —  
たくましさを育てる援助の在り方



### Ⅲ 研究内容

#### 1 たくましさとは

幼児は夢中になって体を動かして遊んだり、遊びのイメージを実現したりしていく過程で様々な思いを体験している。たくましさとはこのような体験の中で、様々な方法や表現を用いて自分の思いを遂げようとする「力強さ」や、ときには挫折感を味わいながら相手を受け止めたり目的を変えたりすることで、自分自身で立ち直ろうとする、「しなやかさ」の両面があると考えた。

#### 2 たくましい幼児像

一人一人の幼児を見てみると、「力強さ」が前面に出ている幼児も「しなやかさ」が前面に出ている幼児もいる。この「力強さ」と「しなやかさ」は、必ずしも均衡がとれていることが重要ではない。ある時は、「力強さ」に傾いているときもあれば、「しなやかさ」に傾いているときもある。また、こうした傾きを個性（よさや持ち味）としてとらえることができる。

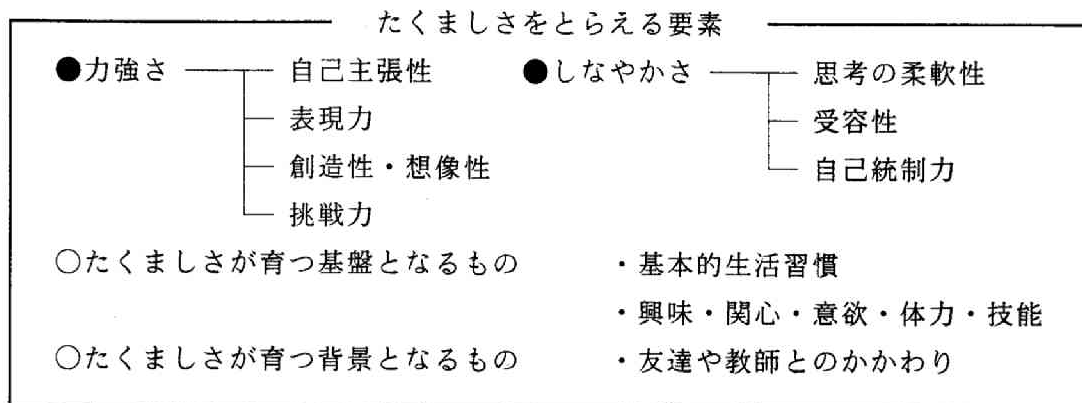
このように、幼児が環境とかかわり多様な感動体験の中で葛藤しながら、たくましさの両側面である「力強さ」と「しなやかさ」をその幼児らしく発揮する姿が、たくましい幼児につながると思う。

#### 3 たくましさをとらえる要素

たくましさには、「力強さ」と「しなやかさ」の側面があり、力強さとは、自分を押し出す方向に働く力と考えた。例えば、幼児はやりたいと思った遊びに目的をもち、イメージを実現しようとして粘り強く遊びを進めていく。また、困難や障害にあっても目的を達成するため自己主張しながら解決していこうとする。このような側面を「力強さ」としてとらえた。

「しなやかさ」とは、自分を変える方向に働く力と考えた。友達とのかかわりの中で、自分のやりたいことができなかったり、思いが通らなかったりした時に相手の考えを受容したり柔軟に対応して自分を変えていく方向である。

さらに、幼児の姿からたくましさをとらえる要素について話し合い、たくましさが育つ基盤となるものや、背景となるものにも気付き、次のように分類した。



#### 4 実践事例

たくましさをとらえる要素を基に、事例を通して分析・考察し、援助の在り方について探ってきた。ここでは、たくましさの要素をとらえる事例と教師の見方を変えていくことにつながった事例について示す。

##### (1) たくましさの要素をとらえる事例

友達の気持ちを受け止めながら自分を主張しようとしているA児

2年保育 5歳児 10月

- ①砂場で遊ぼうと、男児数名が集まる。B児「ねえ、ねえ、僕、隊長になっていい？」とA児に聞く。A児は穴を掘りながら、しばらく黙って聞いている。
- ②A児「他になる人がいなければいいよ。じゃあ分かった。Bちゃんにしてやるよ。」
- ③A児「隊長行くぞ。」と声をかけ、シャベルで穴を掘り始める。
- ④クリーム工場にしようとして、A児は水を運び、掘った穴に入れ始め、B児は、自分では行かず、他児に「水汲んで来い。」と命令しながら遊んでいる。

↓

- ⑤30分くらいたって、B児がバケツでクリームをすくっているところに近付き、A児「ねえ、2人隊長になろうよ。」と言う。
- ⑥B児「いやだ！」と強く言う。
- ⑦A児「僕だってなりたいよ。ずるいよ、Bちゃん。」 B児「いやだ！」
- ⑧A児はしばらく下を向いているが、すぐに自分の作った道路で車を走らせて遊ぶ。

↓

- ⑨A児はクリームをすくっているB児に「Bちゃん、車を水の中に入れようよ。その方が面白いよ。」と言うが、B児は、クリームをバケツですくうのをやめない。
- ⑩A児「ねえBちゃん、聞いてよ。」B児「でも、クリームができないからいやだよ。」
- ⑪A児「半分にして、こっちからクリーム工場、こっちから遊び場にしようよ。」とB児に言う。
- ⑫B児は、A児の側に来て、A児の示した辺りに砂を盛り上げ、壁を作る。A児も土をかけて壁を高くする。
- ⑬A児「Bちゃんのは、クリーム工場ってやつね。」B児「うん。」
- ⑭B児は側にあった車を、クリーム工場、A児は“遊び場”の方で車を走らせ個々に遊ぶうちに場の取り合いになる。
- ⑮B児「だめだぞ、お前はあっちにいけ。」「早くいけ。」と言われてA児は“遊び場”に戻り、「バキューンバキューン。」と言いながら勢いよく車を走らせる。さらに「バキューンバキューン。」と言いながら砂に車を4～5回ぶつける。

↓

- ⑯B児がA児のところに車を入れようとする、A児は「バキューン。」と言いながら、正面衝突させて触れ合いを楽しむ。
- ⑰A児小声で「Bちゃん絶対来ないで。」B児「来たら？」A児「そしたら2人で遊ぼう。」
- ⑱B児は、一度A児の“遊び場”で車を走らせた後、クリーム工場に戻り、車を入れて楽

しんでいる。



- ⑱15分くらいして教師が来ると、A児「こっちに入れてくれない。」とクリーム工場を指しながら訴える。
- ⑳B児「だってね、こっちがクリーム工場、こっちが遊ぶ方にしようってAちゃんが言ったんだよ。」と言い、A児とB児はつかみ合いになる。
- ㉑教師は2人を引き離し、話を聞く。

< 考 察 >

○A児の思いと経験している内容

- ・自分なりに考えたり工夫したりしながら場を作り、車の動きをイメージしながら楽しんでいる。
- ・クリーム工場で遊びたい気持ちが、かなえられない悔しさを感じている。

○A児のたくましい姿を、たくましさをとらえる要素から次のように分析した。

〔力 強 さ〕

自己主張性	自分のやりたい気持ちや不満を、冷静に相手にわかるように伝えることができ、時間はたっているが、教師にも不満を言える。 (⑦・⑱) 自分の気持ちを伝え拒否されるが、再び、気持ちを訴える。 (⑦・⑩・⑪)
表現力	楽しい遊び方を言葉で表現できる。 (⑨・⑪) 穴を掘って長い道路を作ったり、山を作ったりする。 (①・⑧)
想像性 創造性	遊び場の所を道路に見立て、車の動きをイメージして言葉や動きに出して遊んでいる。 (⑧・⑯)

〔しなやかさ〕

受容性	隊長になりたいというB児の思いを受け入れ、B児に沿って動く。 (②・③)
思考の柔軟性	自分も楽しみたい、自分の要求をかなえたいための方法を考え伝えることができる。 (⑤・⑨・⑪・⑫・⑬・⑰)
自己統制力	自分の提案をB児に拒否されるが、自分で気持ちを立て直し、自分の遊びを見つけていく。 (⑧・⑮)

★教師の援助の在り方

- ・たくましさをとらえる要素を視点としてA児の行動を見てみると、自分の要求を実現させるためにB児の気持ちを受け止めながら表現しているが、次第に受け止めることができなくなっている。教師は、A児の「ぼくもクリーム工場でやりたいな。」という思いを受け止め、A児自身がB児に伝えるように援助し、多様な体験を通してB児と受け止め合える関係を築いていくようにすることが大切である。
- ・自分の思いを伝えられるようになっている幼児については、自分の力で解決していけるよう葛藤場面も体験する機会を大切に扱い、状況に応じて援助することが必要となる。

(2) 教師の意識を変えていくことにつながった事例

① 教師が製作への不安感を受け止めたことで、たくましが発揮できたC児

[教師がとらえていたC児の姿]

友達や教師のしていることへの関心は強く、進んで仲間に入るが、面白さが感じられなくなると、すぐ別の遊びに面白さを求めて抜けていく。そのため、充実感を味わう経験が積み重ねられていかず、自ら遊びを作り出していく創造性が育っていないと思われる。

—— OHPで遊ぶ ——

2年保育5歳児 5月

C児と教師が、海の中という想定で、身近な物（ホチキス・洗濯ばさみなど）の影を魚に見立てて遊ぶ。そこに年少児が来て、ラップ芯を置き、円形をスクリーンに映し出している。

幼児の言動と教師の働きかけ	教師や幼児の思い	要素など
① C児「お日様みたい。そうだ雲作ろう。」	② C児が膨らませたイメージに関	興味・関 心 意欲 想像性
② 教師「今度は空みたいにするの？」	心を示すことで、遊びが広がっ	
③ C児「うん。雲は、綿で作るのかな。」	ていくことを期待する。	
④ 教師「うーん。この辺の紙でも、雲みた いな形にすればいいと思うなあ。」と傍 らにあった画用紙の切れ端を見せる。	③ 以前雲を綿で作った、という先 行経験を思い出す。	
⑤ C児はその紙をちょっと見て、「いいよ 先生が雲の形にして。」と教師に頼む。	④⑥⑧ 既製の物を見立てるだけで なく、イメージに沿った物を自 分で作り出して行ってほしい。	
⑥ 教師「雲っているんな形してるから、ど んなのでもいいんじゃない？」	⑤ 雲の形を切るのは難しそうで、 失敗したくないので、先生に作 ってもらいたいと思っている。	
⑦ C児「やっぱり、雲、なくてもいい。」	C児は、製作に自信がないと思 われる。	
⑧ 教師「せっかくCちゃんが考えたんだか ら作ろうよ。丸とか線みたいなのとか。」	⑨ どこを、どのように切ればよい のか分からず、未経験のことに は、最初からしり込みする。	
⑨ C児は「うん。」と返事をするが、何も せずにスクリーンを眺めている。	⑩⑫ もっと気軽に製作に取り組ん でほしいので、教師が無造作に 切るところを見せる。	
⑩ 教師が画用紙の角を切り落として、「こ れで雲みたいに見える？」とC児に聞く。	⑪ 丸い形がウサギに見え、見たも のからイメージが広がっていく ことを楽しんでいる。	
⑪ C児は急に明るい声で、「うん、ねえ、 ウサギの形にしようよ。耳があるように して！」と教師に言う。	⑬ 前に作ったことがあるから、で きるかもしれないと、先行経験 が意欲につながっている。	想像性 創造性
⑫ 教師は、C児に「この位？」「こんな形 ？」などと尋ねながら、画用紙を切る。	⑮ うまくできなかつたら困る、と いう失敗への恐怖心がある。	
⑬ C児「そうだ、雲の上に人間が乗るのが いいよ。前にモールで作ったやつ。」	⑭⑯⑰ C児は相当不安な様子なの	
⑭ 教師「面白そう！モール持ってくれば？」		
⑮ C児「でも作れないかもしれない。」		
⑯ 教師「一緒に作ろうよ。」と言って、ね じる箇所を教えながらC児と人間を作る。		

⑰ C児は作った人間をOHPに映して、「映った！映った！」と歓声を上げる。	で、思いつきを認めたり、技術的な手助けをすることで、何とか自分で作る満足感をもたせたい。	意欲 創造性
⑱ C児「動かすようにしよう。」とモールの人間に、竹ひごをセロテープで付ける。	⑰⑱⑳自分で作ることができて嬉しい。もっといろいろやってみたいと思う。	
⑲ 教師「いい考え！私もCちゃんの真似して棒を付けよう。」と、竹ひごを自分の作った人間に付ける。	⑳～㉑教師が自分と同じように見てくれたことが嬉しく、次への意欲となっている。	想像性 表現力 意欲
㉒ C児は、人間が雲に乗るように置き、一緒に動かす。	㉒洗濯ばさみをつなげたときに竜に見えた、という先行経験を生かしている。	
㉑ 教師「わあ、空を飛んでみたい！」		
㉒ C児「そうですね。そこに悪者の竜が追いかけてくるのね。」と言うと、洗濯ばさみを数個つなげて竜を作り、映す。		
㉓ C児は、人の乗った雲を追いかけるように竜を動かして、「わあ、食べられるう！」と嬉しそうに叫ぶ。		

< 考 察 >

○ C児の思いと経験している内容

- ・ 雲やモールの人間をうまく作れないという、不安感を感じている。
- ・ 教師の手を借りながら、自分でモールの人間を完成させ、満足感を味わっている。
- ・ 自分の考えが受け入れられる喜びや、イメージを実現していく楽しさを感じている。

○ C児のたくましいと思われる姿

- ・ 雲の形から、ウサギ、人間、竜など、どんどんイメージを膨らませ、それを言葉などで表現している。（想像性）（表現力）
- ・ 昨年の年長児の活動、過去の製作活動、テレビで見たり聞いたりしたことなど、今までの経験を生かし創造的に遊びを進めている。（創造性）

教師が気付いたこと

担任はC児を、「根気がない」「遊びを考え出すことができない」と考え、「力強さの面でたくましが欠けている」ととらえていた。しかし、かかわり方によっては、決して遊びの面白さを味わえない幼児ではなかった。この事例から、C児が遊びを投げ出すときの気持ちの中には、製作に対する不安感が大きいのではないかと気が付いた。

★ 教師の援助の在り方

- ・ C児のように製作活動に不安を感じている幼児に対しては、幼児の豊かな想像力を遊びへの意欲に結びつけるために、幼児の思いに添いながら時には教師が教えたり、手を貸したりすることも必要である。
- ・ 遊びに必要なものを作ったり、それを使って遊んだりする楽しさを十分味わわせて、C児の自信につながっていくようにすることが大切である。

② 友達とのかかわりの中でたくましさが見られたD児

〔教師がとらえていたD児の姿〕

園での生活全般に対してあまり意欲が感じられず、のびのびと自分を出していないと感じていた。そこで、もっとのびのびと自己を発揮していやなことはいやと自己主張したり、意欲的にものごとにかかわったりしてほしいと願っていた。

—— 焼そば屋さん ——

2年保育5歳児 6月

D児は登園時玄関で友達や教師としばらくおしゃべりを楽しんだり、友達の世話をしたりする。その後、所持品の始末を終え焼そば屋さんごっこに加わる。

幼児の言動と教師の働きかけ	教師や幼児の思い	要素
① D児はE児とF児が遊んでいる机の所へ行きE児に「なに遊びしてるの?」と聞く。	① E児F児の遊びに興味をもっている。	興味・関心
② E児「焼そば屋。」と答える。		
③ D児が「入れて。」と言うと、E児は「ここに座って。」と言ひ、皿を指して「これ使う時はFちゃんに言うんだよ。」と言う。	③ やりたい気持ちを伝えている。	表現力
④ D児は椅子を持ってきて座り、教師の方を向いて「僕、焼そば屋さんに入った。」と言う。	④ 遊びに入った嬉しさを教師に伝えている。	
⑤ D児はハサミを持ってきて毛糸を切り、皿につめる。毛糸がはみ出した皿を「なんじゃこりゃ、見て。」とE児に見せ「切っちゃおうか。」と言って、はみ出した毛糸をハサミで切る。	⑤ 面白いと思ったことをE児に伝えている。 毛糸を皿にきれいにつめることを楽しんでいる。	表現力 意欲
⑥ G児が綿あめを持ってきて置いていく。		
⑦ D児は「こら、むかつく、Gちゃん。」と言ひ、G児とふざけ半分で引っぱったり押ししたりする。	⑦ D児は綿あめを置いてほしくない思いをG児に言動で表している。	自己主張性
⑧ そのうちD児はやめようとするが、G児は何回も続けて押ししたりするのでいやそうな表情をしながらG児の動きに応じる。しばらくして終わる。	⑧ もうやめたいと思うが、いやな気分を味わいながら我慢している。	自己統制力
⑨ D児は、厚紙でへらの形を切り取る。		創造性 表現力
⑩ 教師が来て「すごい、これDちゃんが切ったの。すごいねえ。なかなか。」と言ひ、毛糸を触りながら「火傷しないでね。」と言って他の方へ出て行く。	⑩ 教師はD児の姿を嬉しいと感じ言葉をかけている。	
⑪ E児がD児が残した紙でへらを切ろうとする。		
⑫ D児「これ見ちゃダメ。」と言って自分の切り取った跡を手で覆う。	⑫ E児に真似してほしくない。	自己主張性



⑬ E児「ちょっとー。」と言う。		
⑭ D児覆っていた手をどかす。		
⑮ E児は切ろうとすることができないので、D児に「ねえどうやって作るの。」と聞く。		
⑯ D児「見れば分かるだろう。」と言う。	⑰ D児はE児に対し優位な気分を味わいたい。	自己主張性
⑰ E児は再び「どうやって作るの。」と聞く。		
⑱ D児「じゃあ、形を作ってやろう。」と描く。	⑱ D児はE児の要求に答える。	受容性

< 考 察 >

○D児の思いと経験している内容

- ・焼きそばを焼くへらを自分で考えて作り、真似して作ろうとしている友達（E児）に対して優位な気分を味わいながら教えている。
- ・友達と同じ場で焼きそばを作ったり、面白いと感じたことを気の合う友達に伝えたりし、友達と一緒にいることを楽しんでいる。

○D児のたくましいと思われる姿

- ・焼きそば屋に興味をもって自分から参加し、E児には思いを言葉で伝えたり、感じたままを素直に表現したりして自分を出している。（表現力）
- ・G児に対して気安さがあり「いやだ」という気持ちを言動で表している。またG児の行為に対しやめたいと思いつつ相手に合わせて我慢している。（自己主張性）（自己統制力）
- ・焼きそばを焼くへらを自分で考えて作り上げている。（創造性）（表現力）
- ・相手の思いを受け入れ自分が得意な技能を発揮しようとしている。（受容性）（自己主張性）

教師が気付いたこと

E児やF児とのかかわりの姿から、D児は今、自分を出せる特定の相手にのびのびと自己表現することが、将来より多くの相手に自分を出せるようになるための基盤となっているのではないかと気が付いた。またG児のしつこさに対していやな気分を味わいながらもD児なりに自分をコントロールして相手の動きに対処している。このような経験を積み重ねながら、D児はしだいにG児に対する自己主張の仕方を学んでいく。こうしたことが、将来しなやかさにつながっていくのではないかと思う。

このように考えてみると、D児にはD児なりのたくましさがあること、また、たくましさとは強く自分を出すことだけではなく、自分のやりたいことを調整しながら相手の考えを受け入れていく姿にもあることが分かった。

★教師の援助の在り方

- ・D児が遊びに必要なものを作り意欲的に遊ぶ姿を認め、教師に認めてもらいたいというD児の思いに応じてD児の自信と意欲につなげていく。
- ・D児がG児の動きに合わせて自分の気持ちをコントロールしている姿を、教師は肯定的に受け止めながら、D児が自分を出している場面や自分の思いを友達に素直に伝えている姿を認めたり、まわりの幼児に伝えたりしていくことが重要である。それによってD児は自分の思いが受け止められた喜びや、自己発揮する楽しさを味わうことができると考える。

③ 忍者になりたいという思いを出して楽しんでいるH児

〔教師がとらえていたH児の姿〕

H児は、活動的で自分のやりたいことに意欲的に取り組み、アイデアを出しながら遊ぶ。しかし、友達に邪魔されると感情的に怒ったり、自分の思い通りに相手を動かそうとしたりすることがある。興味・関心、自己主張、持続力の面では、力強さが感じられる。感情のコントロールや友達の思いを受け止められることができるようになってほしいと思っている。

— 忍者ごっこ —

2年保育4歳児 6月

幼児の言動と教師の働きかけ	教師や幼児の思い	要素など
①H児は『忍者でござる』の曲をかけながら歩いている。テープレコーダを朝礼台の上に置き、踊る。	①昨日の遊びは楽しかった。今日もやろう。	意欲
②教師は、雰囲気作りのために段ボールで作った「岩」を保育室に取りに行く。	②より忍者の雰囲気になり楽しめるのではないかと思い「岩」を提示する。	
③H児は、教師の動きに気付き一緒に運ぶ。		
④忍者のポーズをとったり、高い所から飛び下りたりする。歌詞“石に化けた”の所で「岩」に隠れる。	④忍者になりきって動きや雰囲気を楽しむ。	表現力 創造性
⑤教師は、拍手をしたり声をかけたりして見ている。		
⑥そこへI児が黙って加わり、忍者になりきって飛び下りたり転がったりする。	⑦自分の動きを楽しみたいので、I児は一緒にしてほしい。	自己主張性
⑦H児「ぼくが“増えるの術”といたら出てくるのね。」とI児に言う。	“増えるの術”まで待ってほしいと思う。	
⑧I児は応答せず、忍者になりきって楽しんでいる。		
⑨H児がI児を後から押し、I児は朝礼台から落ちる。	⑨自分が言った通りにならないので不満。	自己主張性
⑩I児「何で押すの。僕だってやりたい。」と言う。		
⑪教師「Hちゃん、押したら危ないよ。」と少しきつく言い「Iちゃんだってやりたいのよね。」と言う。	⑪H児のした行動が危険なことに気付いてほしい。I児の気持ちを感じてほしい。	
⑫I児は、朝礼台に上がり、同じ動きを繰り返し行う。		
⑬H児は、テープを巻き戻し、初めから同じ動作をする。時々、「先生見て。」「石の術。」「ここに隠れるんだよ。」と言いながら岩の後に隠れる。	⑬I児がいても先生が見ていてくれればいいと思う。	思考の柔軟性
⑭教師は、H児の動きを見守る。		

< 考 察 >

○H児の思いと経験している内容

- ・忍者になりきって、十分に自分の動きを楽しんでいる姿から、自分のやりたいことができる喜びを味わっている。
- ・自分のイメージを実現したいが、相手が自分の思い通りにならないことを感じている。

○H児のたくましいと思われる姿

- ・忍者というイメージの世界でなりきって楽しんでいる。(創造性) (表現力) (意欲)



- ・ I児に自分の動きを邪魔されるが、自分のやりたいことを続けている。(自己主張性)
- ・ 自分の目的を遂げながら I児を受け入れるために、自分なりに考え伝えようとしている姿から、相手を受入ようとする「しなやかさ」が見られる。(思考の柔軟性)

教師が気付いたこと

教師は、H児は、自分の都合のいいように指示し、相手の動きを阻止する幼児だと思っていた。しかし、分析していくうちに、H児は、自分のイメージを実現していくために、“増えるの術”を考え出すなどして、H児なりに相手を受け入れようとしていることが分かった。また、友達とのかかわりを求めているのではないかと気が付いた。このことからH児のよさに目を向け、H児の考えを生かしていくことが大切ではないかと思った。

★教師の援助の在り方

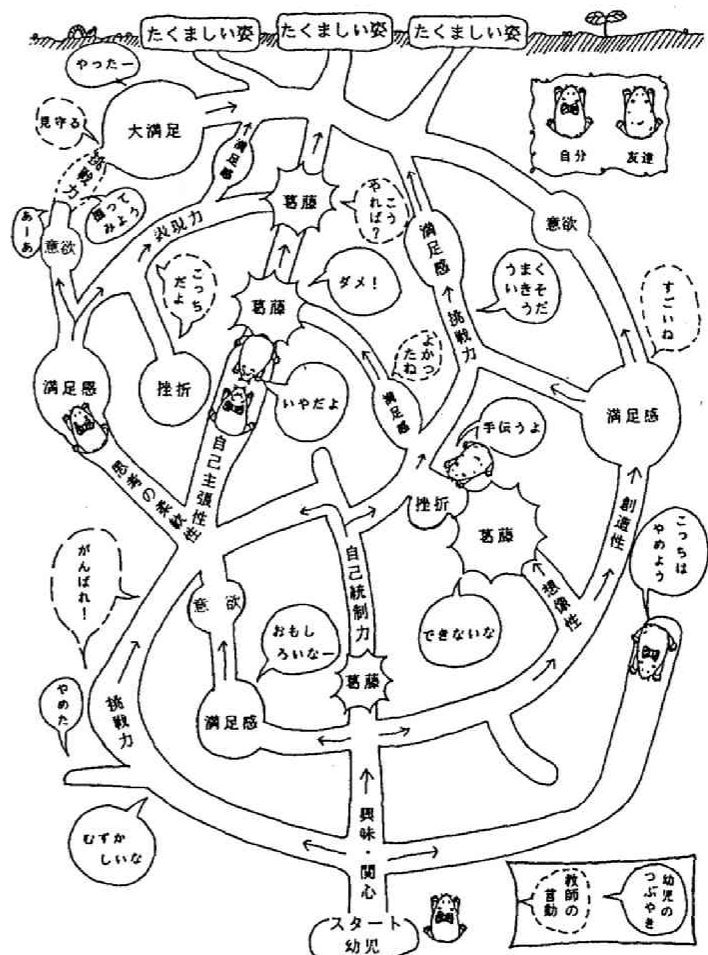
- ・ H児の先生に見てほしいという要求を受け止め、H児が安心して遊べるように見守ることで、H児の安定感を保っていくことが大切である。
- ・ H児の「ぼくが増えるの術といたら出てくるのね。」と言った場面で、H児の気持ちや考えを認め生かしていくことが、H児が自分の表し方や友達とのかかわり方に気付いてけるようになると思われる。

5 たくましさを育てる援助

私たちは、幼児のたくましさが育つ様子の一例を右の図のように考えた。

幼児は、興味・関心が高まったとき、意欲をもってその興味・関心をもった事柄に対し行動を開始する。それが右の図の下の「スタート」のところである。そして、友達・教師などの人的環境や、物的環境から様々な影響を受け、想像性・創造性を発揮して満足感を味わったり葛藤したりする。また自己主張をしたり挑戦したり、挫折をしたりするなど、様々な感情を体験していく。さらに、こうした体験を通して味わった満足感や葛藤など様々な思いが次への意欲を引き起こす。この繰り返しの中で、幼児は「しなやかさ」や

たくましさが育つ様子



「力強さ」を少しずつ獲得し、よりたくましい姿へと成長を続けていくと考える。

そこで教師は、P15の「たくましさをとらえる要素」の項で述べた要素を視点としてその幼児なりのたくましさをとらえた上で、図のように、幼児が葛藤しているときや困難さや満足感を感じているときに、見守る、共感する、具体的な方法を知らせる、満足感をもたせるなどの援助を行っていくことが大切である。

その際、常に気を付けたいのが、すべての幼児が同じようなたくましさを身につけることを要求するのではなく、「力強さ」や「しなやかさ」に注目し、“その幼児なりのたくましさ”を育てよう心掛けることである。

また、幼児がたくましさを発揮するには、友達からの刺激や教師との信頼関係などが大きく影響するので、それらにも配慮した援助を考えていくことが大切である。

#### IV まとめと今後の課題

##### 1 まとめ

(1) 幼児は、表情や言動などで自分の思いを表現している。「幼児の思いを受け止める」とは、様々な幼児のサインを読み取り、その気持ちに沿って対応していくことである。そこで、幼児の思いを的確に受け止め援助していくためには、幼児の表現の仕方からくる印象や感覚で「たくましい幼児」「たくましくない幼児」と受け止めるのではなく、たくましさをとらえる要素を視点として幼児の多様なたくましさをとらえることが大切である。

視点をもって分析することによってその幼児なりのたくましさを受け止めることができ、教師自身の意識を改革することにつながり、援助の方向が明らかになる。

(2) 教師はたくましさを求めるあまり、幼児自身の力で生活や遊びを進め困難や障害を乗り越えていくことを求めがちである。しかし、自分を押し出す「力強さ」だけでなく、相手とのかかわりで自分の方向を変えながらも、自分の思いを実現しようとする「しなやかさ」の面にも目を向ける必要があることが分かった。

(3) 幼児の生活経験の不足や技能の未熟さが活動への意欲を失わせ、たくましさの発揮を阻んでいる事例もみられた。このようなことから、幼児が自分自身で成し遂げた満足感や自信を得て自分で表現する力を発揮できるよう、時には教師が手を貸したり、一緒に行動したり、教えたりするなどのたくましさの基盤となる技能の習得を促す援助が必要であることが分かった。

##### 2 今後の課題

たくましさをとらえる要素について事例を通して研究し、指導の在り方を探ってきたが、今後は、様々な傾向の対象児を選び継続的に観察し、その変容をとらえることによって“たくましさ”の要素を見直し、検討していくことが課題である。